

平成18年度病害虫発生予報第6号

長崎県病害虫防除所長

【気象（平成18年9月15日発表 1か月予報 福岡管区气象台）】

九州北部地方では、天気は平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。
 気温は平年並か高いでしょう。降水量は多く、日照時間は平年並か少ないでしょう。
 週別の気温は、1週目は平年並、2週目、3～4週目はともに平年並か高いでしょう。

要素別確率 単位（％）

要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	20	40	40
降水量	20	30	50
日照時間	40	40	20

* 予報対象地域：九州北部地域

平成18年度病害虫発生予報 予報第6号

向こう1か月間における主な病害虫の発生動向は次のように予想されます。

【予報の概要】

農作物名	病害虫名	発生程度	
		現況	予想
普通期水稻	紋枯病 トビイロウンカ	並 やや多	並 やや多
大豆	ハスモンヨトウ 吸実性カメムシ類	やや多 やや少	やや多 やや少
いちご	うどんこ病 炭疽病（ 注意報第10号 ） 輪斑病 ハダニ類 アブラムシ類 ハスモンヨトウ	並 多 多 並 並 少 少	並 多 多 多 並 並 少 やや少
かんきつ	青かび病、緑かび病 ミカンハダニ	- やや少	やや多 やや少
ぶどう	べと病	多	多
果樹共通	カメムシ類	やや少	やや少
茶	炭疽病 カンザワハダニ チャノキイロアザミウマ チャノコカクモンハマキ チャノホソガ チャノミドリヒメヨコバイ クワシロカイガラムシ	やや少 やや多 並 やや多 並 やや多 やや多 やや少	並 やや多 並 やや多 並 やや多 やや多 やや少

普通期水稻

1. 紋枯病

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 9月上旬の巡回調査(114筆)の結果、発生株率は3.3%(5.0%)、発生圃場率37.7%(38.3%)であった。

イ 9月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、発病株率31.0%(23.8%)であった。

ウ 気象予報によると向こう1か月の気温は平年並か高いと予想されており本病の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤散布にあたっては農薬の使用基準を遵守し、圃場周辺への薬剤の飛散に十分注意する。

2. トビイロウンカ

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 9月上旬の巡回調査(114筆)の結果、株当たり虫数は0.6頭(0.2頭)、発生圃場率は55.3%(27.3%)であった。株当たり虫数が5頭以上の圃場も認められ、今後坪枯れの発生が増加すると予想される。なお、9月2~3半旬にかけて長崎市琴海町・現川町、諫早市多良見町において坪枯れの発生を確認した。

イ 9月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、株当たり虫数は2.2頭(2.8頭)であった。

ウ 気象予報によると向こう1か月の気温は平年並か高いと予想されており、本虫の発生に好適である。

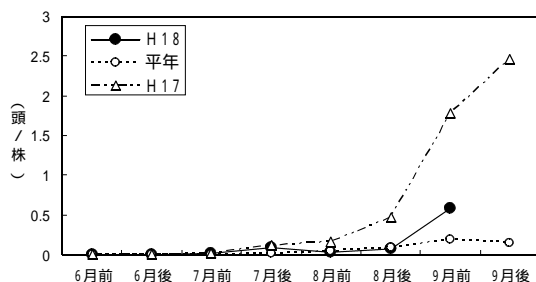


図 トビイロウンカ株当たり虫数の推移

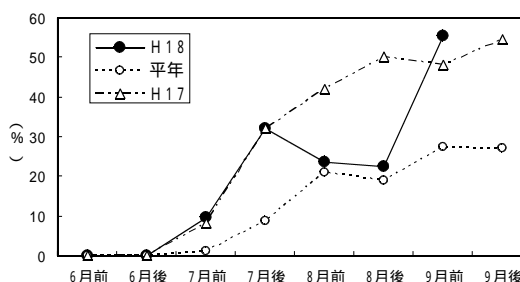


図 トビイロウンカ発生圃場率の推移

(3) 防除上注意すべき事項

ア 圃場間や同一圃場内でも発生に大きなばらつきが見られるので圃場の見回りに努め、できるだけ圃場全体の発生状況を把握する。トビイロウンカが1株当たり数十頭以上認められる場合は早急に防除する。なお、トビイロウンカの密度が高い圃場において収穫可能な時期に達した圃場ではできるだけ早めに収穫する。

イ 今後、8月30~31日に飛来した世代の次世代幼虫の発生が増加してくると思われる。これまでに防除を行った圃場においても発生に十分注意する。

ウ トビイロウンカは株元を好んで寄生するので薬剤散布にあたっては株元に十分薬剤が付着するよう丁寧に散布する。

エ 薬剤散布にあたっては使用基準を遵守し、圃場周辺への薬剤の飛散がないよう十分注意する。

大豆

1. ハスモンヨトウ

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 9月上旬の巡回調査(18筆)の結果、幼虫の寄生株率は12.3%(10.7%)であった。白変葉の発生圃場率は66.7%(45.0%)であった。卵塊～老齢幼虫の発生が認められたが、卵塊～中齢幼虫の発生が主体であった。

イ 9月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、幼虫の寄生株率は76.0%(27.4%)であった。

ウ フェロモントラップ(諫早市)における雄成虫の誘殺量は9月以降増加している。

エ 気象予報によると向こう1か月の気温は平年並か高いと予想されており本虫の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 圃場の見回りを徹底し、白変葉の増加が認められたら早急に防除を行う。

イ 幼虫の齢が進むと薬剤の効果が劣るのでできるだけ若齢幼虫期に防除を行う。

ウ 薬剤散布にあたっては農薬の使用基準を遵守し、圃場周辺への薬剤の飛散がないよう十分注意する。

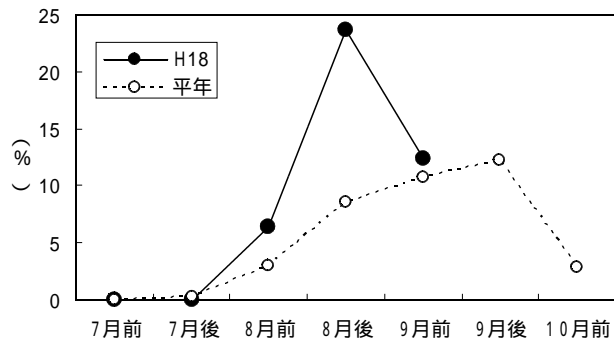


図 ハスモンヨトウ幼虫の寄生株率の推移(巡回調査)

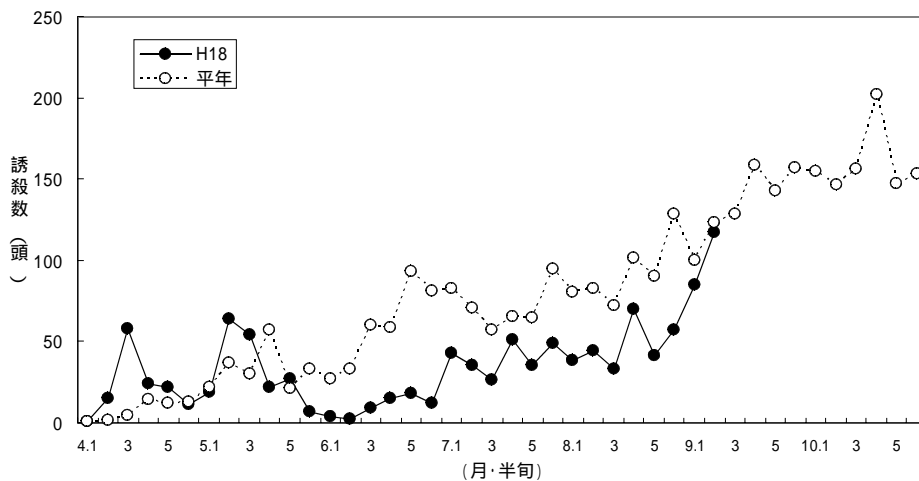


図 ハスモンヨトウのフェロモントラップにおける誘殺状況(諫早市)
平年: H8～H17の平均値(最大・小値除く)

2. 吸実性カメムシ類

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

ア 9月上旬の巡回調査(18筆)の結果、寄生株率は0.1%(0.8%)、株当たり虫数は0.01頭(0.01頭)であった。発生圃場率は5.6%(17.2%)であった。

イ 9月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、寄生株率は2.0%(2.0%)、株当たり虫数は0.02頭(0.02頭)であった。

ウ 気象予報によると向こう1か月の気温は平年並か高いと予想されており、本虫の発生に好適である。

いちご

1. うどんこ病

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

9月上旬の巡回調査(33筆)の結果、発生を認めなかった(発生圃場率0.9%、発病株率0.0%)。

2. 炭疽病

平成18年9月15日付け、**病害虫発生予察注意報第10号**による

3. 輪斑病

(1) 予報内容

発生程度 多

(2) 予報の根拠

9月上旬の巡回調査(33筆)の結果、発病株率は10.5%(2.5%)、発生圃場率は36.4%(16.8%)であった。

4. ハダニ類

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

9月上旬の巡回調査(33筆)の結果、寄生株率は2.7%(2.4%)、発生圃場率は12.1%(12.5%)であった。

5. アブラムシ類

(1) 予報内容

発生程度 少

(2) 予報の根拠

9月上旬の巡回調査(33筆)の結果、発生を認めなかった。(寄生株率0.5%、発生圃場率7.6%)

6. ハスモンヨトウ

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

ア 9月上旬の巡回調査(33筆)の結果、食害株率は0.9%(5.8%)、発生圃場率は27.3%(58.8%)であった。

イ フェロモントラップ(諫早市)における雄成虫の誘殺量は9月以降増加している。

(3) 防除上注意すべき事項

幼虫の齢が進むと薬剤の効果が劣るのでできるだけ若齢幼虫期に防除を行う。

かんきつ

1. 青かび病、緑かび病

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

向こう1か月間の降水量は平年より多い見込みであり本病の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 収穫時の傷から感染しやすいので、果実にハサミ傷等をつけないように丁寧に扱う。

イ 樹上の傷害果や落下した果実は園外へ持ち出し処分する。

ウ 輸送中の発病を予防するために収穫前に十分量の薬剤を散布する。

エ 薬剤散布にあたっては農薬の使用基準を遵守し、圃場周辺への薬剤の飛散に十分注意する。

2. ミカンハダニ

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

9月上旬の巡回調査(39筆)の結果、寄生葉率は6.0%(16.7%)、発生圃場率は51.3%(60.9%)であった。

ぶどう

べと病

(1) 予報内容

発生程度 多

(2) 予報の根拠

9月上旬の巡回調査(12筆)の結果、発病葉率は8.8%(1.1%)、発生圃場率は41.7%(20.0%)であった。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 菌密度を抑制するために、収穫以降も薬剤散布を実施する。

イ 落葉は翌年の伝染源となるので園外へ持ち出し処分する。

果樹共通

カメムシ類

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

ア フェロモントラップ(諫早市)による誘殺量は平年よりやや少なく推移している(図)。

イ 8月下旬のビーティング調査の結果、ヒノキにおける枝当たり虫数は0.1頭/枝(前年1.5頭/枝)で、発生量はやや少なかった。

ウ 8月下旬のヒノキきゅう果口針鞘調査の結果、県内14カ所の平均口針鞘数は10.7本/果であった(口針鞘数25本/果が離脱の目安)。

エ 7月下旬のヒノキにおける枝当たり幼虫数は2.3頭/枝でおよそ一月の間に急激に減少した。

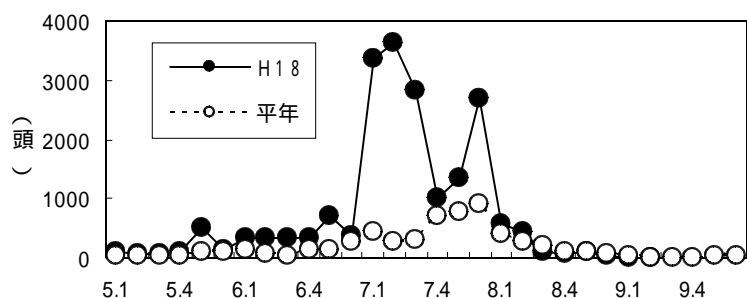


図 チャルネツヤアオカメシの誘殺状況(諫早:黄色コガネコル) (月・半旬)
平年値は平成11～17年の平均

茶

1. 炭疽病

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 9月上旬の巡回調査(20筆)の結果、1㎡あたり発病葉数は5.9枚(11.8枚)、発生圃場率は40.0%(63.5%)であった。

イ 向こう1か月間の降水量は平年より多い見込みであり本病の発生に好適である。

2. カンザワハダニ

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

9月上旬の巡回調査(20筆)の結果、寄生葉率は0.9%(0.5%)、発生圃場率は30.0%(10.0%)であった。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤感受性が低下しやすいので、同一系統の薬剤は連用しない。

3. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

9月上旬の巡回調査(20筆)の結果、たたき落とし虫数(A4版トレイに5回×4カ所)は14.7頭(10.7頭)、発生圃場率は75.0%(60.3%)であった。

4. チャノココクモンハマキ

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 9月上旬の巡回調査(20筆)の結果、1㎡当たりの巻葉数は0.1枚(0.2枚)、発生圃場率は10.0%(11.5%)であった。

イ フェロモントラップでの誘殺量(東彼杵茶業支場調査)は平年よりやや多く推移している(図)。

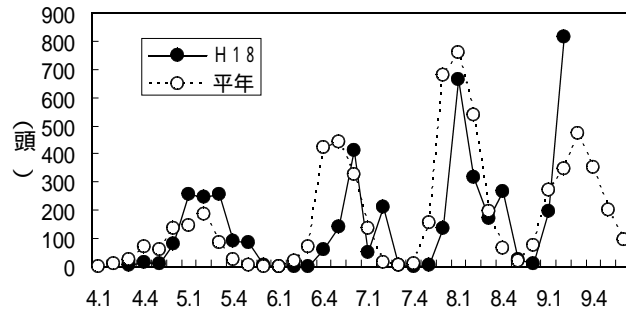


図 チャノカモンハキの誘殺状況(東彼杵:フェロモントラップ)(月・半旬)
平年は平成13年~17年の平均値

5. チャノホソガ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 9月上旬の巡回調査(20筆)の結果、1㎡あたりの巻葉数0.5枚(1.2枚)、発生圃場率は、40.0%(18.1%)であった。

イ フェロモントラップでの誘殺量(東彼杵茶業支場調査)は平年並で推移している(図)。

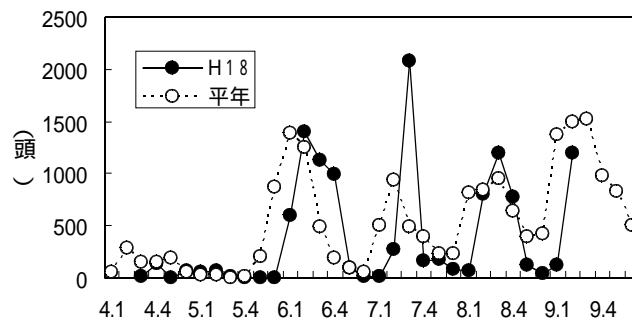


図 チャノホソガの誘殺状況(東彼杵:フェロモントラップ)(月・半旬)
平年値は平成13年~17年の平均値

6. チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 9月上旬の巡回調査(20筆)の結果、たたき落とし虫数(A4版トレイに5回×4カ所)は1.9頭(0.5頭)、発生圃場率は60.0%(16.1%)であった。

イ 五島市で発生が多くなっているので特に注意する(たたき落とし虫数は9.5頭、発生圃場率は100%)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤感受性が低下しやすいので、同一系統の薬剤は連用しない。

イ 幼虫は葉裏にいることが多いので、葉裏にも十分薬剤がかかるよう散布する

7. クワシロカイガラムシ

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

9月上旬の巡回調査(20筆)の結果、寄生株率は1.1%(6.0%)、発生圃場率は20.0%(21.7%)であった。